聖　書：Ⅰサムエル 29：1〜11
説教題：この男を帰らせて
日　時：2017 年 9 月 10 日（夕拝）

今日の箇所でついにペリシテ人とイスラエル人の戦いが始まります。ペリシテとイスラエルの戦いというだけなら、いつものことであって、特別なことはありません。しかし今日の章の特徴は 2 節を見ると分かります。ペリシテ人の側ではペリシテの領主たちが百人隊あるいは千人隊を率いて進みましたが、何とそこにはガテの王アキシュと一緒にダビデとその部下がいました。これは一体どういうことでしょうか。なぜこの大事な戦いの時にダビデとその部下がペリシテ軍の中にいたのでしょう。この背景については以前に見た 27 章 1 節〜28 章 2 節に記されていました。27 章でダビデはサウルを恐れてペリシテ人の地へ逃れて行きました。それは主の命令によったとか、ダビデが主に祈って与えられた導きだったとは書かれていません。ダビデと主の関係は触れられておらず、むしろ彼は恐れのあまり、自らの知恵に頼ってイスラエルの国から出て行ったことが暗示されていました。

ダビデはペリシ人の地でどのように生活していたでしょうか。本来敵国であるペリシテ人の土地でただで住まわせていただくわけにはいきません。アキシュのしもべとしての働きをしなくてはなりません。そこで 27 章 8 節にあった通り、ダビデはゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人を襲い、戦利品を持ち帰っては、まるでイスラエルの南の町々を攻略したかのような報告をアキシュにしていました。それが偽りであることがばれないため、ダビデはそれらの町々の住民を皆殺しにしていました。アキシュはこのようなダビデを信用して、27 章最後の 12 節でこのように心の中で言いました。「しめしめ。ダビデは進んで自分の同胞イスラエル人に忌み嫌われるようなことをしている。彼はいつまでも私のしもべになっていよう。」

しかし問題はイスラエル人との戦いが始まったことです。28 章 1 節でアキシュはダビデに言います。「あなたとあなたの部下は、私と一緒にイスラエルと戦うために出陣してもらうよ。そのことを良く承知しておいてもらいたい。」　それに対してダビデは答えました。「よろしゅうございます。このしもべが、どうするか、おわかりになるでしょう。」　こうは言ったものの、果たしてダビデはどうするのでしょう。もしアキシュと一緒にイスラエルを攻撃したら、ダビデはもはやイスラエルの王になることはできま

せん。民を救うべき王が逆に民を滅ぼすからです。その結果、せっかくここまで慎重に事を導いて来た神の計画は台無しになってしまいます。しかしだからと言って反対に今回の戦いを前に尻込みをしたらどうでしょうか。これまでイスラエルの町をさんざん打って来たのに、なぜ今回は後ずさりするのか。話がおかしいと怪しまれ、彼のウソがばれることになるでしょう。こうしてダビデは出陣せざるを得ない状況に追い込まれたのです。29 章 1 節でペリシテ人が全軍をアフェクに集結した時、ダビデはアキシュの後に整列していたのです！

しかし、その時でした。ここでまさかの展開が生じます。3 節でペリシテ人の首長たちが、ダビデと一緒に戦いに出ることに反対します。彼らは言います。「このヘブル人は何者ですか。」　アキシュは答えます。「確かにこれは、イスラエルの王サウルの家来ダビデであるが、この 1、2 年、私のところにいて、彼が私のところに落ちのびて来て以来、今日まで、私は彼に何のあやまちも見つけなかった。」　しかしペリシテ人の首長たちは言います。「この男を帰らせてください。私たちと一緒に戦いに行かせないで下さい。戦いの最中に、いつ寝返るか分かりませんから。」と。そして彼は「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った」と歌われていた、あのダビデではありませんか！と警告します。

これを受けてアキシュはダビデに、大変申し訳ないが、他の領主たちがそのように言うので、今回は穏やかに帰ってくれないかと説得します。私はおまえを信じ、一緒に戦いに行ってもらいたかったが、ここは何とか怒りを収めて、私の言うことに従ってくれ！と。それに対してダビデは 8 節で「私が何をしたというのでしょうか。」と抗議します。もしすぐに「分かりました！」と受け入れたら、怪しまれてしまいます。だからこれは不本意であり、屈辱的なことでさえあるというジェスチャーをしてみせたのでしょう。しかし内心、どれほど深い安堵の思いで一杯だったでしょうか。こうしてダビデは同胞イスラエル人と戦うという最悪の状況を避けることができたのです。そして翌朝早く、ダビデとその部下はペリシテ人の地へ帰り、ペリシテ軍はイズレエルへと上って行ったのです。

このようなＩサムエル記 29 章は何を語っているのでしょう。一言で言えば、それは神の大きな大きなあわれみということでしょう。自分で自分を救い出すことができない状態にあったダビデを、主がこのような仕方で救い出してくださった。ここに見られる

主のあわれみについて三つのことに注目したいと思います。

一つ目は主は黙ってこのあわれみのわざをなさっているということです。今日の章には、主がダビデをこのように導いたという記述はありません。また「主」とか「神」という言葉もほとんど出て来ません。ほとんどないと言ったのは少しは出て来るからです。一つは6節。そこでアキシュが「主は生きておられる」と言っています。もう1回は9節。そこでもアキシュがダビデを指して「私は、あなたが神の使いのように正しいということを知っている」と言っています。いずれもアキシュはダビデを重んじ、評価するがゆえに、彼に合わせて「主」とか「神」という言葉を使っています。しかしその他に主のお名前は出て来ませんし、聖書記者も「主がこのようにした」などとは記していません。このことは今日の章には主はおられないという意味なのでしょうか。ここに記録されていることは特に主のみわざとは関係がないということなのでしょうか。そうではないでしょう。むしろ著者は、ダビデは主の驚くべきあわれみによって救い出されたというメッセージを伝えているのではないでしょうか。

ここに私たちが思い巡らすべき主のあわれみがあると思います。主は黙って導いておられます。まるでそこにご自身がおられないかのようにして、そこにおられます。このように導いているのはわたしだよ！とこれ見よがしに示すことなしに導いておられます。そのような主のあわれみを良く考えるように！とこの章は逆にそのことに触れないことによって語っているのではないでしょうか。

このことを私たちの生活に当てはめて考えいと思います。神は私たちに対して、あなたを助け、守っているのは、このわたしだ！といつも明白な形で示しておられるのではない。むしろ隠れた仕方で、ひそかな方法で、ともすると私たちが気付かないでいるような仕方であわれんでくださっている。そういう主の働きがあるのではないでしょうか。私たちが知っているあわれみがすべてではないのです。実は私たちが認めていない、見出していない、それとは気づいていない多くのあわれみがあるのではないでしょうか。そのような主のあわれみに支えられている今日の私たちです。そのような主のお導きがあることを思い巡らしたいのです。この箇所がはっきりと、これは主のあわれみによると語っていなくても、それがダビデを支え導いたことを認め、賛美するようにと私たちを招いているように、私たちも自分の生活における主のひそかな無言の配慮と導きがあることを良く見て取って、御名をほめたたえるべきではないでしょうか。

二つ目に注目したいのは、ダビデがこのようなあわれみを受けたのはなぜかということです。彼が悔い改めたからでしょうか。自分の過ちを認めて信仰の立場に帰ったからでしょうか。そうではありません。全くいいところがないダビデだったのに、主はあわれんでくださいました。私たちとしては、ダビデが苦しみの中で主の名を呼び、その結果、あわれみを受けたというなら納得します。あるいは悔い改めにふさわしい行動を取り始めた時に主の導きを受けたと聞くなら満足します。しかしそういうダビデの姿はありません。なのにこのような救いを受けたと聞くと、私たちは困惑するのです。こんなことでいいのか、と。もちろんこれは悔い改めなくても良いとか、神はあわれみ深いと言って悪い生き方を続けていても良いということではありません。ここ数章におけるダビデにふさわしかったのは確かに重いさばきだったでしょう。しかしそれにもかかわらず神がこのように導いてくださる場合があるということです。私たちの行ないによらず、このように導いてくださる場合がある。

私たちはこれについて神に文句を言うでしょうか。しかし私たちの生活を振り返っても、同じことが言えるのではないでしょうか。私たちが今日こうして恵みの内に保たれ、支えられているのは、私たちが主の前に信仰的に正しい状態にあるからでしょうか。ダビデとは違って、いつもすぐに悔い改めの生活をしているからでしょうか。そうではないのに、ただ神のあわれみによって導かれたこと、困難から救い出されたこと、さばきから助け出された経験がいくつもあるのではないでしょうか。いやその連続なのではないでしょうか。いつも神の前には不十分な者なのに、理想からは程遠いのに、周りの人から見れば、どうしてあのふさわしくない人にあれほどの恵みとあわれみが注がれるのかと不思議がられるような祝福を頂いて、今日このように御前に立たせて頂いている者なのではないでしょうか。

ダビデはこれまで立派な信仰の歩みを重ねて来ました。しかしその彼にも、まるで不信仰者のような歩みをする時があったのです。困難に囲まれて正しい状態から落ちた時があったのです。そういう状態にあるからと言って神は彼を捨ててしまわれない。私たちは私たちの生活にも同じような神のあわれみの導きが与えられて来たことを思って御名を賛美したいのです。私たちが信仰的にどうしようもない状態に陥った時も、神が支えてくださった。この章のダビデの場合がそうだったように、神のあわれみはまさに一方的です。この神を見上げて、私たちは感謝と賛美をささげて主を礼拝すべきではな

いでしょうか。

最後にもう一つ神のあわれみについてこの箇所から学べることは、神があわれみのわざを行なう際の、その不思議な方法についてです。主はどのようにして、自分で自分を救い出せないダビデを助け出してくださったでしょうか。それは敵であるペリシテ人の声を通してでした！前にも似たようなことがありました（Ⅰサムエル記 23 章)。ダビデはマオンの荒野でサウルに追われ、袋の鼠の状態にありました。もはや捕らえられる最後の瞬間を目をつぶって黙って待つより他ないと思われる状況にありましたが、ぎりぎりの土壇場で「ペリシテ人がこの国に突入して来ました！」との一報が入ります。このため、あと一歩のところまで追いつめたサウルは急いで引き上げざるを得ませんでした。まさかの救いでした！今日の章もそうです。もうここから逃れることはできない。後は最悪のシナリオに進むしかない。そんな時にペリシテ人の首長たちが「この男を帰らせて！」と言ってくれたのです。「イスラエルとの戦いに彼を参加させないでくれ！」と。ダビデはどんなにビックリし、また安堵したことでしょう。神はどのようにして私たちを困難から救い出してくださるかは分かりません。私たちの思いを超えて、ご自身の御業をなさることができます。そのことを思う時、私たちはローマ書 11 章 33 節のように、「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測りがたいことでしょう。」と頌栄をささげずにいられません。あるいはイザヤ書 55 章の「天が地よりも高いように、わたしの道はあなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い」という御言葉も思い浮かんで来ます。

このことは私たちにとっての励ましです。主にあってはどんな状況でも道は開けている。主に不可能なことは一つもない。また私たちのこれまでの歩みを振り返っても、このような奇しい主の守りを経験したことがそれぞれにあったのではないでしょうか。思わぬ仕方で助けられたこと、間一髪で守られたこと、その連続なのではないでしょうか。

ダビデをこのように導いてくださった主が、私たちに対してもそのようにいてくださることを見上げて今夕、主を礼拝したいと思います。神は私たちが気付かない内に、ご自身を目立たせない形でも働いてくださっています。おられないようにして、私たちがあるところにともにいて守っていてくださいます。またふさわしくない者なのに、御前に不甲斐ない者なのに、一方的なあわれみによって導いてくださっています。そして私

たちの思いを超える仕方で善を導いてくださっています。その主を見上げて賛美をささげるとともに、そのような方として信じ、より頼んで歩んで来なかったことを思うなら、悔い改めの祈りをささげたいと思います。そしてこのような主を新しく見上げて私たちの感謝と愛を告白し、この神をほめたたえ、宣べ伝える民としての歩みを御前にささげることへ導かれたいと思います。